



志保之利五篇一

借 5
508
57





漢卿問天神地示之義朱子曰註疏謂天氣
 常伸謂之神地道常默以示人謂之示又曰
 地祇者周禮作示字只是示見著見之義又曰
 地之神只是万物發生山川出吳之類
 周問何故天曰神地曰祇人曰鬼朱子曰此又別
 氣之清明者為神如日月星辰之類是也此變
 化不可測祇本示字以有迹之可示山川草木
 是也此天象又差者生人則死為鬼矣又曰天
 子祭天地諸侯祭山川大夫祭土祀云々
 伏按自天地言之只是一箇氣自一身言之我之氣
 即祖先之氣亦只是一箇氣所以才感必應然天子

統攝天下、負荷天地間事、与天地相関此心使与天
地日月山川河海、祀百神無所不祭、諸候主一
国治封内事、此心使通封内山川一家、電門等故祭
之、不関天地日月等、大夫無封国、只有家司命中
雷電与門行其所用者、故祭所謂、祀餘不関
士庶人或立一二祀、以隨其分、不祀禮又敬遠之者、恐
其贖之再也、降禮廢而後、專禱祀非享私祭無
所不至、祖先人々祭之、猶有大宗小宗之分、且不敢僭
祀也、我國自中也、以来以淫祠為神風、以妖術為神道、
誣民感也者、幾万人平

○長岡為磨と小とのハもと、勢田の祠及家あり、物々

惟是の門人となり、附會妖異の事を、以て愚俗を欺自
隱者とも、一々奉祀を、以て一箇の門徒、以て人の崇敬
を待り、のち其子と、その子と、必神系圖を、あつ
兒屋命より、惟是為九つ、つゝ是實忌憚事
なり、記とのみ、ていゝえ、佛名、佛才血脈の相傳、且效
其神、佛も、も、免く十八神、乃護摩、加持、等、乳蜜
家の搏粕と、秘、一箇の、吳端、盜食、遊人、の

○神代卷曰、處處、小嶋、皆是、潮沫、疑成者矣

此解法、家管、得、ま、予、海中、船を、治、る、人、の、湖
汐、又、つ、ま、波、浪、の、查、浮、沫、と、凝、り、て、小、大、浮、く、ま、り、

さま修成し〜い〜海濱の俗を以てよく読み處
のしほりの湖浜のつら〜根をく〜といひて
物内つら〜紀は筆〜い〜い〜
○ 畫者如日月蠅而沸騰之云、
是亦海邊田舎の蠅多を以て〜三遠別れ野舎
蠅多其声所傳〜

○ 或蜜家此俗の曰靈氣記の古書ありて世は行り〜
脱丸弘法此筆とて是之を性灵集の多〜
又字拙〜是靈氣灌頂の書多〜後人大師
流して作の所多〜予彼靈氣灌頂の切致
を〜い〜今ト部氏兼俱の書

我秘傳を〜い〜多、彼灌頂の言流意旨を
て作ら〜い〜思密家〜
傳〜其の経法義軌〜令〜建所〜
〜我の〜
〜所甚〜ト部氏は神代〜
相傳〜了〜世多〜
を〜故〜
法家〜
〜一〜
流〜
名〜

中凡や...
みや

○ 漢嵐拾葉

正和二年壬子六月小門興圓所述壬子元年也

右本云建武四年十二月二十八日於江列成就寺

書寫應永七年八月於京師泉涌寺真言院

所寫本在吉見幸和之藏乙丑月讀之抄其二

三備遺忘

天照太神与日吉權現一体習合矣院然說云

信景曰當日熊野熱田日吉等皆有太神宮

一体之說是密家依金胎两部習合之傳而

先為神佛一体習合之說後大神宮与某社一体

習合之說大神宮國家宗廟故与己之所奉
祀祠渾殺以僥倖天下之崇敬是淳厚所觀之奸
詐喋黷神明者也

大宮聖真子十禪師宗廟神二宮社神其他社

全子客
人等也 櫻神也

信景曰十禪師号本備宮也然以十方衆生法喜

禪悅食之語附會之或以天孫受十代之禪而牽

合日吉鎮座記隨之共忘其故為誑誤者也

山主七重習

一 無迹山王 二 本地山王

三 觀心山王 四 無作山王

五三密山王

六元初不知山王

七如影隨形山王畧其記

是等皆以法華之旨所建

大宮不入僧祇

梅是始准伊勢所為歛

天照大神者自性法身素盞烏尊者無明鉄

塔者法身塔婆也河岩戸者無明法義也大力二

神者是惠二法也廢火者諸方便教等

按卜祓氏多以大神隱窟者為理說曰我心原明也

以邪念憚眊之者素盞烏尊為思日神入窟也

諸神集尊設燎奏樂者後明之工支才力雄開

岩戸者以勇去剛也六合一時明者用邪念而復

明理本原意也等是故浮屠之說變詞者

而不知紀本義可亦謬哉

山王使者之花嚴曰神狼獾猴王又云山母山神王

山王秘決之無動寺山王者叙尊應迹以申為垂迹

天神無氏示申為神地祇有氏示土為祇

梅使者浮屠之說也秘決解神字亦附申申

伸之申而不大歲所答名浮屠多以私意解文字故

此集第一山王字義謂堅橫一三點者牽合不縱不橫

非一非三之觀法為權現記宣

熱田明神蓬萊宮者熱田社是也揚貴妃者今

熱田明神是也此社後有^{ワシマ}五輪塔婆銘釋迦種子
瓦字此塔婆揚貴妃墳墓也

此說至拙哉然至近也彼塔石殘社後是依浮屠之說
建立也

熱田明神者金剛尊大日也故以五智習本地或又
以真言三部經為本地以宝釵為神体皆是金界
知門表示也

是以藏釵習合密說者也

蓬萊宮者不壞金剛智体也法華宗意本地三身
指久遠壽量習不老不死^{ト云ク}
是以有蓬萊之妄說又仍所附尊者也

熊野權現之熊野胎藏權現金剛權現等之
密家以我神初充兩部以習合其後男女文合而習
合兩部恣不律是立川邪義所一起也

熊野參詣路次道言男^ヲサシト名^ケ女^イタト名^ニヒツソ
キト名^ケ法師ソリト名^ケ之

是效伊勢齋宮忌詞所設又熊野專為佛事
何^ト用僧尼忌詞意將准神宮所造者歟

天照太神每日法樂如何若山家大師每日神法明
法樂法之常在灵鷲山及餘諸住所我此工安穩
天人常^ニ充滿^ス

嗚呼浮屠執^ル所習^ヲ換我國故以胡書詞祭^ル神

拾遺叢話は双頭の荷花と唱とせし人買一おしき
うしよのふりき彼夫婦を存したる下初録一き宋の男
死して後い花の是はうのうしよと示しう此方
帝又異なる内生をたて大う妖術して存しはりま
利園樂工とせん一又

利園樂工とせん一又

生 感場の藤屋の歌、市の人よあ、あうく
さうしよのこころのあや

旦 以曾、頼為、本、三、我、松、糸、の、う、う、侶、優
の、せ、う、と、う、う、の、あ、り

未 始よ、う、う、場、を、う、う、者、と、う、う、う、の
ワキ、あ、こと、の、う、う、う、

己 言其、陀、ッ、テ、カ、ウ、の、狂、言、侶、優、の
う、う、け、あ、り

此類を、あ、り

後撰集十九

伊物、か、ま、り、り、き、う、ん、と、い、ま、ん、と、う、と、れ、る、と、き、て
藤の、洞、を、あ、と、う、う、き、物、を、た、ん、後、ま、り、た、く、と、う、う、
名、が、あ、る、と、う、い、ま、り、よ

か、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
あ、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

梅、と、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

○ 白藤 食上生 白藤也

一あまをといふりのま

白瑠 食上生 白毛

今れぬま毛のちやといふは

生硬 不軟 熟也

あまをといふは

け敷古く類纂ノセマ多かり

○ 月乃道六まの郊一と並一をれ

行しとあり人ともあをとい

け寄はる因法師尾流のあまをといふは

千載集ハ又えうすくうの寄はるを

けりもん田舎のまをといふは

光巻あまをといふは

きしてといふは

け寄り西山沈立上人隆興一徳りの

又けりといふは

とをりといふは

二 新千載ハ又えうすくうの寄はるを

○ 伊雑宮より出せり 伊勢三宮の寄りと板りせり

ハれをといふは

の春巻流國器部 田原村小寺寺の

の初宿多り一黨して仰り一所の安あり之社之宮
等と歌也江戸本町豊後氏 鳴呼一國の私歎又りくちくの
精神を費し一もん是ゆに神を護人を歎とせり為す所

○ 二水記曰 歡終寺前 永正十四年五月七日向干庭

田亭二水 朝飯後万松軒入御福一建業ケウ 語平家
無双之音声也音者とりんまわるといふこと

梅より古座以換授の事あり一帝宮ハ異人と禁より音
を愛せ明石建業定一宮出たせりい比より建業油換
授し書次所たのみの句當とあり一又よりし成座

○ 一と建業のそ一史ハ正佛坊のり一と家の元孫
みありし一應仁の末堂上の法家信長を便あり改年と
事概事多し一と堂家と征して福を納めたり
音者一を次と昇とま令出せり一久我家納め豊臣家
起りて一統の日堂の家一領分領附一と中津後の代り
大とせし一をれとまを凡くくとも久我家音去の將
をを聽し申ありしと

○ 虚海賦惟神 是宅亦祇是廬天神 又宅とを
比神又廬と一と中臣後初又比神 神者遠山廬近
山廬と一と一是又似しと後と号之傳り

○三位法師 玄旨

長園兵部太浦源友老其子参議忠與称細川
小寺下野守源重隆

源侍従長政称黒田

久松氏 元菴系姓今称源氏

大久保 宇津守也 稻葉 林氏越智 宿称

立花 大友 真田 海軍氏滋野姓

奥平 足利氏平姓 土屋 金丸源氏

深溝 大給 形原 松井 櫻井

野見 共源氏今称松平

石河 小山友系姓 板倉 混河氏源

永井 長田大江姓 秋月 大森谷

久留嶋 河野氏越智姓林同系也 稲系

大田原 在原姓 山口 大内氏多々良姓

甲斐庄 橋姓元楠氏

近年賜松平称三ツ家多々矣

京師所司代平信長の時村井春長斬 信忠亡いあり 日同時に御免

平後真信昌事代司ささる唐及長あは侍後従中位
下伊賀守源祐重板所司代とさるてよりその伯後信慈
より十二人

あはれ元源九子司代とさる系司より申出候とさるり十一年

前權大納言光貞卿山系後延室

○ 梅ス神宮雜事記景行天皇廿八年九月イッハ五百野

皇女供奉始也天武天皇白鳳四年九月多基子内

親王御枝代之始也是依大友皇子之已勅實之曲也

先規錄多基子之上錄内親王十六人其内度尊小

事之女宮子非皇女祓内親王雖書宣下而不見

正史歟

○ 和列三編山内鎮苑社有と如必之内史の祭ハ疫と

禊祓事此社やむの疫祭多々也

○ 大鑑有祓宜大大稱梅是祠官拜立位者歟後世諸

社神人自称某大夫代々呼同稱者近世僭上而

若俗稱某左衛門某兵衛等歟習俗不可愛可嘆也

○ 卜部兼俱明應三年十一月中臣枝臆書有一卷

梅と々と御宇之の牛乃方之清天白皇貝視中天下疫病

流れを宣俱二代の前日良慶勅代奉して京中

の男女也年い六月也と云々又祓禊を云々祓禊苑疫

神也云々しそ次の年も疫病有り歟と年のようと云

その次のもも民疫病多々と云々みしるも前のようと云

うける京師の男女を云々と云々と云々と云々と云々と云々

と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々と云々

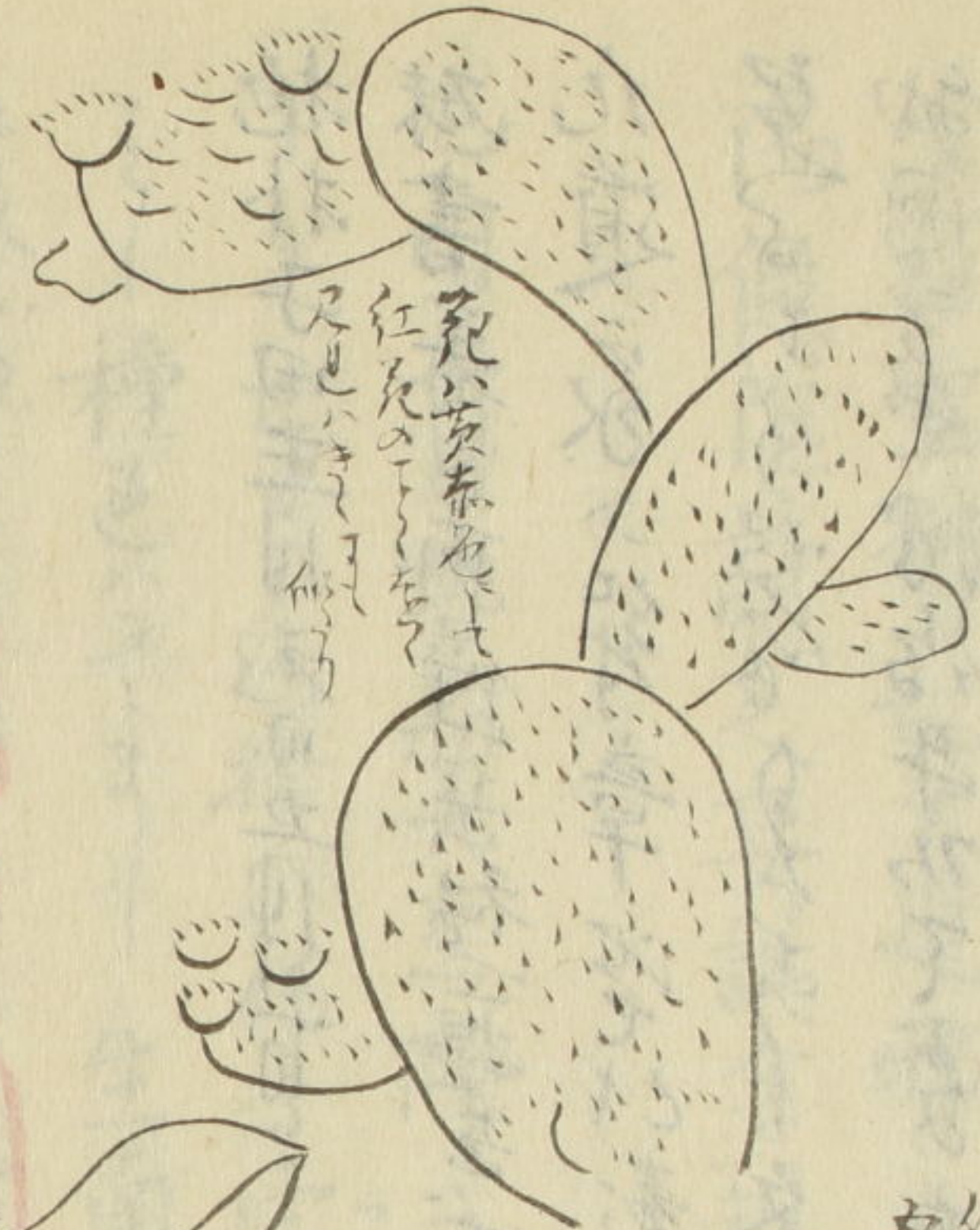
あらは五所也定むと云々と云々東山伐禊院之禊也納也

信景抄の中世歌人者流浮屠のみまらむかゝる妄誕と奉
附して秘訣として傳授とを又六儀、天竺より唐へ傳へたり
亦も通悉律師傳授し來り倭歌の六儀とをなすありとも
の記妖妄とす。云々。玉葉集ノ大前參減御の記
是のこそ人の國より傳へりて神代をいへり家傳の如
くこそありて万のゆへ大小とも漢家より傳へりとのあり
ぬせ五七七の言のまのこもむし。すまのよのこも八七の神代
よりそよよとせぬ倭歌の如くもいへりて胡竺の言をいけて我神
代風をいへりていさあり。この、虚誕を我神代とすまの如
くありのあり也

○開合名目抄一卷 紀別根來寺の傳本也五音四声の如

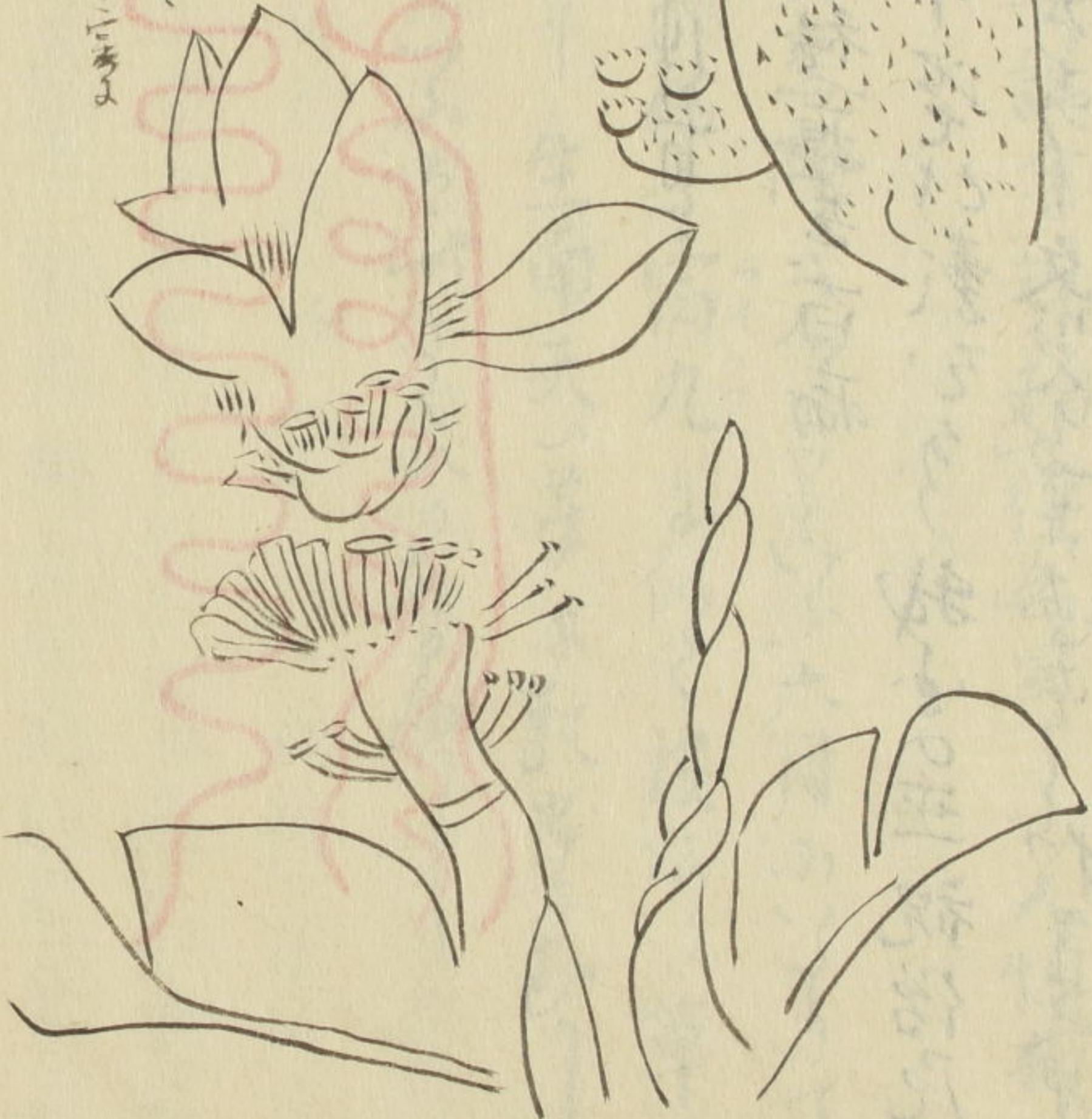
いしものや、清濁の息、やと記せる書あり
西山善峯寺、證空号善惠源空門人土御門贈従一位前
内大臣源通親号我七男号公定一曰加賀、持也、親孝号西栗
生光明寺蓮生号信房宗都宮座主宗圓栗田圓白道兼孫右
之子座主三郎宗綱始為中原家、養子、住外記後
飯本姓其子宇都宮朝經左馬尉其子成總左尉其子宇
都宮檢校賴經始依朝政事出家、入源空之門、即蓮生
是也其子修保亮下野守恭經母平將政二男石見守宗
朝皆子孫多矣女子二入一嫁内大臣通成一嫁權大納言為家
伊勢國司公宮在、大河内北畠一族相替居之、行司務從三位顯雅
北畠權大納言顯能親房、三月權大納言顯恭左中將滿雅

霸王樹花



花は赤也
紅花の
足はハカ
ハカ

花史流生八鏡又い樹の
あしとて花をさるりや
靴でも男年入る道根の
をうり年をさるりや
このわりの花をさるりや
希しくも



芭蕉の花首のまねり予東澄
うとて人とのり今世も多
但し花をさるりや
育れいをさるりやの芭蕉

さつりすりわりの河國
又とさるりや道生八鏡
木肥状生如常色四卒
為奇樹可也

日本外語...
一巻...
日本外語...
一巻...
日本外語...
一巻...

日本後記之乙酉七月讀之乃畧抄吉見氏家藏書二十卷是雅

猶有版文承和七年上九月序按七當八九類聚國史作

十九續日本紀十承和八年十二月丙寅朔甲申脩

日本後紀訖奏天御拾芥抄二月九日蓋闕

一卷桓武天皇

神祇伯者是天照大神神主延曆十年土月年己

勅明經之從不可習吳音發聲誦讀致訛謬熟

習漢音十四年四月勅之禁之凡下百姓將田宅園地

賣買與之寺更之五月右京人上毛野兄國之流之土仇國之自

稱諸天之妖言惑之衆之

二卷十五年三月勅禁祭北辰

三卷十六年七月勅男女有別之至于之身集之混濁之無別

宣加禁制之

十七年神宮司之補任限以六年之相替之

七月坂上大宿祢田村磨之創建清水寺之

九月宮笏應之正儒子之假之薩之出身之

十月宮笏禁制兩京畿内夜祭飲舞之

四卷十八年二月乙未朔乙未贈正三位行民部卿

兼造官大夫之養作備前之回造和氣朝臣清磨之費之

本姓般利之別公之後改藤野之大學南邊以私宅之置

弘文院之五月遣渤海使外從五位下内藏宿祢之賀茂

磨等言飯卿之日海中夜晴不識所着于時遠
有火光尋逐其光忽到鴻濱訪之是隱岐國智支
郡其鬼無人或比奈麻治比賣神常有灵驗高賣
之輩漂岩海中加揚火光賴之得全者不可勝數神
之祐助良可嘉報伏望奉願幣例許之

九月禁京畿百姓奉北辰灯

十九年二月禁新民蓄錢貨以求爵位

四月勅象茅隱陽外親王以下不得服用

二十年四月令越前四司新屬牛祭神

五月定准犯科板

大板上板中板下板等其毆傷若重者板淨

之外依之法科罪

五卷二十一年九月廢相模國足柄路間宮荷途以富屋燒

碎石塞道也

二十二年四月造宮大工物部建磨等

六卷

二十四年七月勅疫病之時民庶相憐不通水火存
心救療何有死亡父子至親畏忌無近隣里路踈強更
復何言亡者衆多莫存於此宣諭所司務備富

若不道寺改隨即科處九月丁卯勅於清瀧峯高碓
道場起都尊大壇受灌頂三摩耶是本朝密灌

之始也十二月勅賜坂上田村磨清水寺依先是禁私寺也

七卷

平城天皇延曆二十五年
四月平安宮五月辛巳即位於大檀殿改元大同非礼

也国君即位踰年而後改元者録臣子之心不忍

一年而有二君也

九月壬子遣使封_二左右京及山崎津難波津酒家_一
甕以水旱成災穀米騰耀也

大同二年四月_四能參議号置觀察使近衛府者
為左近衛中衛府者為右近衛左内唐尼近大將坂上田
村麿右近大將是左右大將始也_注

九月壬子禁新兩京巫覡事右被_レ左大臣宣_レ你奉
勅巫覡之徒好說禍福度民之愚仰信妖言淫祀
斯般系厭咒且多積習或俗虧換淳凡_レ

十月丙辰勅令三位以上並着淺紫_一
攝_レ續日本記二文武天皇大寶元年三月服制一位者

皆點紫二位以下三位以上者赤紫云

八卷三年九月詔曰官多則政贖人少則事_一秘_一云

九卷熾城天皇大同四年五月癸酉聽五位以上通用_一

白木笏_一五年十月奉幣帛於八幡太神宮_一裡日
廟自此先多稱太苜亦延曆以後也

十卷弘仁年九月禁祭北辰三年禁_レ男入尼寺_一女赴
僧寺九月勅恠異之事_一聖人不語妖言之_一罪
法制非輕而諸國信民_一柱言_一或言及國家或

妄陳福禍註法亂紀莫甚於斯何仰諸國令加
換察自今以後若有百姓輒稱不詭宣者不論男
女隨事科夫云云

十卷弘仁四年比歲天下旱行實加麥其後拓不五年
閏七月御遊越院

十二卷六年四月幸近江國滋賀韓崎過崇福寺註

大僧都采忠并自煎茶奉御註六月山城國乙訓
物集毛豆國北背註七年二月下酉朔日有蝕之丁未

八日有蝕之註梅村十日也日食何有乎是誤記乎

十三卷八年四月於大學察使習漢詔九年四月有制
改殿閣及諸門之号皆額題之十月辛巳朔詔曰

改錢文曰富壽神宝

十四卷十一年二月詔曰其服大小神事及季冬奉

幣諸陵則用帛衣元正愛朝則用衾冕十二章

朔日愛朝聽政愛蕃國使表幣及大小諸尊則

用黃檀涂衣皇后以帛衣為助祭之服以椅衣為

元正愛朝之服以釵礼衣為大小諸尊之服皇大

子從祀及元正朝賀可裛冕九章朔望入朝元正

愛群官若群臣之賀及大小諸尊可服莫丹衣

十五卷十二年四月官符林不斫損水辺山林事註大河

之源其山鬱蔚然小川之流其色童正厚不及知流之細

大隨公而生夫山出雲雨河潤九皇山童毛尽谿流
湖乾フミ百姓悍遠負近川上林任意伐採至有
旱年溉之苗魚動遭損害穢此之田也云林所
損テ路邊樹木事云道也之木復垂蔭為休息
所秋結實民得食云八月伊勢大神宮云此天神
者天下貴社云十三年二月賦貸云運賃云
六月庚辰廿尾張四熱田神奉授從四位下十四年
三月割越前國江沼加賀二郡為加賀國云
十六卷弘仁十四年淳和天皇
五月有詔云臣諱平城太一國之內有上兩太皇
瀛表裏中未詳前聞云詔除太上天皇号并

撤服御物云勅世書首尾稱臣此表躬也不可敢開
宣附使奉返云十一月永不諱之直言
天長元年三月乙亥天沙門守敬空海奉詔修諸兩經
渚于神泉苑八月宮符應令諸國郡司譜圖謀
一紀一進云務存實錄不致假濫云
同月丙申宮符一擇良吏一遣巡察使一順時令
一云奉賢避邪一云擇國守令諸氏子孫咸讀經史云
參議從三位多治比真人今磨奏狀備緬尋云古
典歷賢前王勞於求賢逸於經國伏望諸氏子孫咸
下大學寮令習讀經史學業足用量才授職者宣
五位以上子孫年二十已下者咸下大學寮云

十七卷二年正月加賀國之改為上國 十二月之今歲

浦嶋子飯御雄畧天皇御宇入海至今三百四十八年

也三年九月庚午官符親王任國守之為勅任号

稱太守以一代不可泉例

十八卷四年九月空海請佛舍利内裏禮拜灌浴

九年

十九卷六年三月己丑叶大和國高市郡賀美鄉耳

南備少飛鳥社近同郡同鄉鳥羽少依託宣也

七年

二十卷八年今年奉勅滋野朝臣貞主子諸儒撰

集古今文書以類相從凡有一千卷名秘府畧

九年己亥尾張國海部郡人山忌寸目刀自賣

紛正稅縮三百來產三男也 十年二月白皇帝遷御

西院乙酉白皇帝於淳和院讓位于皇太子

謹讀後說抄其三四以備遺忘平城遷越二帝号

以其迂御之地名淳和為離宮共非謚例

又按禁北辰祭後也更興之是淫祀甚矣妙見祭又知夫

神名比奈麻治媛余世未普知是紀始見年又春秋

二仲一七日佛事蓋和俗彼岸身推舉彼讀金剛

般若波羅蜜多之按波羅蜜到彼岸則彼岸身

名依般若經而起年然延曆二十五年春分中彼岸身

始也又按自續日本記至後紀諸國疫死多或賜醫藥

或祈諸社或轉般若事詳載之而無牛頭天王
脩法之支然牛頭天王祠後也所建而依延長凡士記為
素盞烏尊欣我回疫神名見祝祠式所謂八衢彦
神八衢愛神久那斗神凡三神也牛从天王者見佛經
其脩法有天刑星儀軌原款氏所行也然傳教弘法
之時未行之歟正史實錄無其據見

○尾張津嶋牛頭天王祠社傳欽明天皇元年鎮座不見

日本記又牛頭天王名此將未
有歟

改曆雜事記聖武帝天平五年吉備飯朝於播列連
牛頭天王廣峯社記及峯相記說同之譌日本記十二
吉備飯朝天平七年乙亥四月也紀末謂牛頭天王事

津嶋社記嵯峨帝再建之云

日本後記類聚國史等無建牛从天王祠事當時天
下疫多然亦無祭牛从天王說

清和帝貞觀十一年以津嶋天王勸諸山城國祇園社

三代實錄無此說二社註式及播列飾磨郡廣
峯牛从天王為京師祇園本社凡國史無牛从天王之事
然則中世以後所祭須東鑑見尾列津嶋社名

禪宗海古字ハ僧綱を賜ふる一只色衣を許さる之
其肉脩濟流ハ五山及妙心大德寺等の任職のまゝなりて
紫衣を賜る多肉ハ亦不尊位を許さるなり奉はさり
曹洞流ハ越前ノ永年ヲ能登之惣持寺ハ入院の儀と

ありて傳妻みりて編旨ありて先内しては只徳妻
の人より切と盡と賜もろ淨土宗の住りて一寺の後
住み名と假本を達して編旨を下し侍奉内多
きり禪に和尙とのりて淨土宗と云ふ宛なるり

淨土宗編旨

着香衣令糸 内宣奉祈 宝祚 延長者依

天氣執達如件

新暦年号月日

寺某

何國某上人

西山流の房とあり 鎮西流の房とあり

又也房の子書あり

某國某寺の住年某切と及勅拜ありては此記と

益香合まりの心のく中へくこみりてありては

表巻の某の大納言と

中納言宰相の年号月日あり

禪宗の編旨のありては御れと令仰りて衣と束帯
のりて生と道世知恩院又信とありて院家の信都又補
せし御又東園塔上寺良興言大信とありて後を外と
仰りやと右信と云ふなりては禪宗の房と云ふなり

元龜年九月日 平信長房延曆寺

桓武勅願 信教同基

天正年六月日 菅原利家房能列石勤山

天平寺 天智勅願 天正年三月日 豊臣秀吉房

紀別根来寺 天正年四月日 豊前國彦山伏

又体奇くして御よあを不入の事とせんとすれは至思
の甚しきことありし也

○ 無量壽經卷二 曹魏の信康信鑑胡信也 譯せり下卷
造悪の事と説文子兄弟室家夫婦都無義理不順
泣夜相欺惑係論不忠巧言諛媚嫉賢謗善王上不
明任用臣下臣下自在機偽多論等とす南の魏世の
下りてはつたに似たり胡佛固君臣の礼義を以て善とせど
何れ世説ある其善とす多道家の説あり又
之を佛所遊履国邑丘壘靡不起 国豊民安兵戈
無用宗徳樂仁務修礼讓とて聖人過化存神
の徳を假りて安全の佛説に似せ

○ 武田信玄諸所の城主之為を我士将等より言さしめて
そんたふとふむく事其中は遠刈乾の城主五郎右内膳の
霜月十あまりにまゝに中より柳屋と云つ枝阜（勅也）
の祝してきりりめり一城の分とめ（ま）せり也あつた
後乃賜らせし事神君賜と拜して後そ柳とハりて
捨しめあつた有り信玄方と感しりりと甲陽軍監より
神君御時二年中よりあつた多まるとも
今川の赤坂とて世に急病ありと云り何れ赤坂ありし
は光原院前將軍の馬のいりた女乞食とてその信三赤河
系あり馬をまゝとてあつた愈つた病ありとて用むり
やう病愈將軍よりしりて一宮隨巴とてふら此師り

所々々々々々の方々書留させありし御軍中事の後隨
巴路河之從て氏實某方とありしなりし人死す
後人今川の赤軍といふなり
右人の之赤軍の二方ハ人參り一
居御二兩足本方なりといふ
○早陽軍監より氏康公と遠より人老信玄公一申入行ま
ちより人の備後より入湯に公みらふより人を信長公
入信長公と遠より人又行まらぬ人自身老老を
右の四將はまりり而も信と云

○源有親任上列德川郷應永年中鎌倉持氏每忌之
諱宮仍出郷而隱寂氏号長阿陀陀佛ト令子親
嗚呼當世の武士義を不知只貪欲ありて以てくし二君
又は之をくしと云ふ抄り々々嗚呼

氏号長德阿陀陀佛經歷諸列以永亨元年到三河
國松平郷云々

一説曰普廣院教永亨二年二月討鎌倉持氏改關
東制法將授新曰氏族亡之源有親父子潛出德川
郷義孝子以末
七世居之逃作時衆將氏應永二十三年十月伊豆ノ
國投落其後敵鎌倉熱為義教亡矣
一説曰德川下野守滿義屬新田義貞而勅王新田
氏不得其志而亡矣自此德川家通志於吉野右京
亮有親滿義嫡孫統理進親季子也奉遠列井伊谷
宮之合子与足利之兵戰處々信列並合王家敗之有
親及令子三河守親氏被執而入京師時有遊行他

阿久在洛乞其命為時衆所謂長阿德阿是也長
阿未寂之後德阿入參列坂井村今作移居松平郷松
平太郎九衛門親氏武畧聞近境士庶奉為主今至今
崇教遊行上人者謝先祖往日之恩也

三說似而不同未說蓋有故者欽史親氏主興起也

似明太祖其八世世所謂系譜以親氏奉親氏先為三代然奉親

八世九世之異者親氏令弟先代信光于今後讓家故而神君御天下文化被宇内嗚呼其神

其武万歲之供基歟

有親主親氏主入三列之年我敬公所述大相四年

譜序為永享元年己酉卜

天文十年壬寅十二月九日

神君降誕

或傳云生天野清右衛門某之家其妻初奉御
乳味シ云自天野孫四郎景儀仕親氏主而來
子孫代々奉仕
德川家嗚呼不二朝一夕之公恩氏族宜殺身而
尽忠者也

參列猿投山神君寺德川家御牌中

親氏公

康安元年辛丑四月二十日卒云トアリ

恭親公

永和三年丁巳九月二十日卒去トアリ

右年号可疑 康安元年ハ尊氏薨後四年ナリ

永和亦義滿代也然^{有本按攷}

家忠日記増補追加卷題曰親氏主康正二年四月

二十日卒恭親主其年九月三日卒^{是實錄}

信光公

長亨二年七月二十七日卒也

信光公恭親ノ御子トアリ凡實ハ親氏男也康安元年

ヨリ長亨二年三月二十八日也御父御死去ノ後コシ

亦ト遠キ不審歟恭親ノ御子ニシテ永和三年ヨリ

長亨二年三月百十二年也名ハ恭親御卒年ニ信

光公生ケタラトモ御年百十二歳ナレトモ親氏ノ

御子ナレトモ親氏ノ御卒年ニ信光公生ケタラトモ御

元年百二十八ノハシサノニ御長壽ノ沙汰ナレトモ此御年

入年可歟且御系圖ニ永亨ノ元參列ハ親氏入御トアリ

又一説義教將軍鎌倉持氏ヲ追テ後新曰ノ未ヲ搜

故ニ有親親氏御父子徳川ノ郷ヲ出タラトモ持氏

没落ハ永亨十一年歟康安元年ニ後コト七十九年永

和三年ニ後ハ下六十二年歟決ニテ親氏ヲ後光嚴院ノ

御宇ノ御人トスヘカラス

元和八年四月大久保家書ニ親氏主應永元年逝去

恭親主永亨二年卒ノ事マシマシトあれトモ亦不遠ナリ

○高坂彈正曰井上新尼海ノ雜談ニ唐ノ何人ヨリ一記者

ト云心ノ至リクヤト云ノ人ト譽南蠻ナリ價ノ高シク云云

着てきくれ美り者をもく人々中にもあはれあくるり
その人の廢敗南蠻流也と云ふは實は智ともくとも
あくして高位は居衣をかきり人々不きり作らん美秋
の之考也近世法家の俗令を出し紫衣香衣を買合
ふ物物し物異端の乞食家あるも今更之より
祿と拜し俸と承するも亦面奪乞士のゆえんとすり
信玄の家臣物騎馬數通計九千三百四十騎と云ふ
是老臣より以下小身より日六醫師曰朋族樂まで
其内又撰すは餘介は是輕六十三百七十三と云ふ
人數一万余七七百十三計もありと云ふ二万余は其内
馬も亦其人もは其身もしてあつたりと云ふは其

今軍法流しと云ふりり多記書のゆゑ説可なり被孫
子にこれ主師六軍は諸侯の軍と合す下は對して説
と云ふ其量は異なり甲別一斤田舎ありて殊は諸方
敵多しや一の由新しきり時多れは其威敵心と云ふり
は且悪人ありし信玄の智有る者多し強弱是れと云ふ人
御使しむと得家老より記者ありけり後いへるは其
事よりしれり有り人今の世上驕下あつるは家中より
あつて御は敵を非患多し軍中も智あり久しき後古法と
知りしは亦ありけり是時風俗の考あり文育の士は私説と
云ふは其なりけり若し其故ありて秀吉の臣ありしは其

山三六尾列古活りの人なり

○ 前田利家從三位権大納言の父ハ尾列愛知郡一柳庄荒子村の人
源氏トシテ系圖ヲ前田荒人若原利昌ト記ス

○ 前田権中納言源家久津ハ右大将頼朝の子鳩河を母トシ
志久十三世源氏ト又義久の母也

○ 吉田宰相源輝政池田祖父池田紀伊守恒利始一乃松院
義晴將軍ニ任テ一將軍江別宮太の山中ニ薨セテ一後
藤繁一ト宗傳トシテ名一尾列ト稱シ任セリ

○ 渡辺氏ハ渡邊源氏ハ大臣融の曾孫箕田之兒子渡辺也
尾府下奉仕ハ渡辺ハ尾ノ子孫源次久十三世右馬允滿綱
一説ハ尾ハ仁明天皇の才三皇子右大臣亮の四男ハカハ源氏の子孫源三教ノ子綱トシテ

鹿苑院大相國又仕人ト武者所トナリ其云孫源次道
綱参列額田郡浦和村ニ移リ任セリ其子源を全ハ
綱長親主信忠主ニ奉仕一享祿二年九月廿八日
卒ト是より代々徳川家ニ仕ルマシ

○ 對列の系氏ハ權中納言平知盛の子右馬助雅宗を宗ト
稱ス

○ 小寺官兵衛孝高ハ黒田義濃守源識隆子也識隆嫡列
赤坂の族少年ニ孫ニ衛政識ヲ養ヒ子トナシテ一孝高
の孫也仇忠之ハ松平の孫ト賜リ

○ 坐魚ササ以監米釀魚為道熟而食之
俗作鮓非也
魚鱗物 魚魚音魚ニ 魚鱈音光新
魚也 魚也

○ 清人種々の纏と彩板して海をられらるる一山翠雲の
とそあまのいさよ所の地あり我皇俗纏さししの義ありぬ
ともつてハ文雅みして見るは是より項日生敷三百六十行
のちとひよりりらるるのち町をさるる又は是より招牌の傳り
寺院の牌院と一般より愛活のぬ道人の情倭漢習り
すりまひ

○ 木犀の詩朱子文集九より

喬木生復涼 芳蕤散秋馥

未覺歲時寒 杖屨方遠屨

○ 續日本紀四 和銅元年三月乙卯 勅太宰府卿

大貳三州及尾張守等始備仗
其負帥八人太貳并三州及尾張守四人三州二人

其考選事力及公麻田金史生云々

梅スル 太宰府を西鎮三州ハ帝京の在き脩り尾張玉
ハ路の方を色して殊に非常を抄りて比多岐り余一
うまふ未のせりあり

○ 勝宝感神聖武皇帝

天平應真仁正皇太后 光明皇后也

宝字称徳孝謙白皇帝 日本尊号是如也

○ 續日本紀一 文武天皇即位二年十月乙卯

遷多氣大神宮于度合郡
是存宮大神宮司をこのりみや柳度合宮はすりり也
祢宜の説きりまひ

○ 延喜太神宮式伊佐奈岐宮月讀宮其録神名

ミルノカミノミナツ

而瀧原及並伊雜三宮不録其神コト但記大神造
宮而已其為速秋津之兩神伊佐波止美玉タマ在屋二命
則何不書其号乎若凡宮者延喜以後所建彼所撰
社無其号又度專宮別宮十宮者原大宮地神トコノカミ也
見儀式其為大年土御祖宇賀御魂三神者蓋後配享
須抑祢宜所專歟或二座三座夫而不一決大神宮撰
社二十四處之内大土御祖社三座国津祖社二座度專
宮撰社十六處之内度會国津御神社一座
是皆本居初任之人而直不土靈祠歟

是等ノ事書して以神宮ニ送リ其説を可聞の事

○ 度長十二年

三月九日天智三帝 兵部康景駿列真国寺
ノ城ヲ出奔ス先此リ康景城館脩補ノ科

二采地ノ竹ヲ伐シ積貯是輕教事ヲシテアレシヲ監
セシムル所ニ御領田原ノ郷民夜シ侵シテ破竹ヲ時々
盜取ノ間番ノ足輕其盜人ヲ追ヒ張本共ヲ捕ヘテ殺害
ス殘黨遁シテ生ル者ノ代官并キ甚助某ニ認フ并キ使助
ヲ康景カ家ニ遣ス諭シテ曰御領ノ民無罪ニメ死ニツクト聞
タトヒ罪アラハ何ゾ吏ニ告サル彼民ヲ殺ス足輕ヲ誅シテ罪
ヲ贖ヘシト康景曰盜賊令ヲ犯シテ我領ニ入ル夫人ノ物ヲ棖
擾スル者ハ必以テ殺ス是當時ノ定法歟輕卒私意ヲ以テ人
ヲ殺シ非ス予令シテ盜人ヲ殺サシム彼何ノ罪アリテ誅セシ
若過ノ名アラハ我其罰ヲ得ヘシト并キ同康景カ武功ヲ忌
ム故上聞シテ曰康景武勇ニ驕リ家人シテ御領ノ民ヲ殺

又全盜人ニ非スト讒訴スニ甚憤給フ然仰ニ曰康景ニ於テ
卒尔ノ所為有ルハカラスト雖吏認ル所歟スヘカラス他日コレシ
乳明ニテ其言否シ定ムヘト本夕上野夕正純康景ト好故ニ年
ノ重ヨリ告テ曰足下無過トイハレ上ニ對ニテ決断及ニ事
其恐レキニアラス曲テ彼輕卒等ヲ斬テ御憤ヲ休自
シ過ヲ射シ奉ルヘト云康景曰直シ以曲テ上ニ從フハ勇士
ノ恥也所旦下賊トイフハ豈無事シ殺サニヤ不如身ヲ退ニ
ニハト其夜夜ヲ掛テ城ヲ出テ相列將野ニ隱ルニ慶長野間
○土岐頼藝濃列ヨリ一四四の京油賣某謀リテ
故ニ時ニ濃列ヨリ其母ト云汝の家を長井者爲某ノ
親ト云ニテ一トテ家人ト云テ云々其母ト云テ罪ありテ

種ノの謀也何ノ逆ニ後何を殺一其地を領スルニ
先帝ノ名色何々何招ニ誘ニ又信一其母ハ長井を殺マ
テ罪セヨリリト云々其後主君頼藝を以テ逆テ全流死
を有テリ彼ニや信ウヤ一其母以テ己ノ妻トシ自蘿
醫シテ奇後逆トト名アリ彼婦頼藝の子ト云テ
みく道ト云テ家ありテ産キ是と義龍ト云テ後乃レニ
ウ実子二人を以テむルニ又弟を以テテや義竜と云テ
ウト云テ或人義竜め告ク曰道ニハ実父何カ
吾子ハ汝の子アリ道ニ頼藝を以テ殺セリ吾子の為
ムト父の可ク死ニシト云テ云々其母義竜ト云テ無慚
無義の者アリト云テ其母ハ恨ミ云々やウク弟を殺シ

道とて攻し其後心のまゝ濃列とて我威と
 物とて攻し其子毫無の城を兼つてつり
 人望うく悪の長し其後西方の二人衆とや
 一氏家福葉伊賀をとり其後毫無と報く織田
 家より属し其後永禄七年八月信長毫無の城
 を攻圍しこれより紀伊より一々奪とりて
 城と捨くまげ七をまきあそりあそり悪人の道とて
 富貴の命ありしやありし毎にゆきのりて下
 訓点とて之を物れ高き節も古書に傳しとあり
 任そ諸神治月日六月西荒和御振早旦御供備進
 於任江威西宮東帶布氏人衣着看之己割先氏人提宮

在應神宮等於下客殿邊着座各人有筆次權少
 祝酒面々前杯入之後祝言祚宜申々次酒一酌後
 賦管取割天次身返次座列立下客殿束牛水進
 之自至氏人冠木綿役人次參御前之於閑口御宿院
 頓宮兩方假屋賦管陰膳役取之取割天返
 万葉茅三丹生王歌曰木綿年次可比奈尔懸而天有
 左佐羅能小野之七相管年取持而久堅乃天川原
 尔出立而索身百麻之年
 在里小野也所心
 万葉茅十六神樂良能小野今梅住吉有固身
 六千鳥鳴其仇餘川舟石二生管恨取而之奴力布
 草解而益年任永丹索而益年

○ 無題詩集一六月夜 法體古今 世上為流例熊林鐘

晦日禊除家詠無他詠十年 頌期有定期六月

凡苦地標送迎夜如石湍水冷欲秋中未知何物

号官板結草如輪令道家

○ 倭姬命世記乙若命以麻神 菑靈等近傳

姬命 而令夜解トアリ

○ 天津祝詞 喜撰式天シハカト云云此心ニテ心ハベシ

○ 周列氷上山傳記 固附命多其中抄彼曰天已用四

物現其中一点神坐 四帝ニ 比神即 アツクアヒニミテ 天主

大乙称 天御中主 比一点五星化 立行 又七星生ス立行

ヨリ天神 七代ヲ生ス

梅 ハニ 是道家ノ説ヲ我々ノ神名ニ習合セル説ナリ

周坊人國都濃郡 鷲頭山星ノ宮後同國氷上山ニ

移ニ妙見星堂ト号ス是本百濟 淋聖來朝シテ

祭リ禊メシト云

○ 勢列國司北畠居城初一志郡 多氣庄其後多氣

郡 田丸御所飯高郡 大河内御所同郡坂内御

所トク將命トシテ監セシむ是を國司のニテト云

又其後一志郡波瀨御所同郡岩内御所友方

御所トク公官ト云テ家ト移セシ者ニ凡を護セリ

○ 小野道風ハ敏達帝の七世參議峯守此孫父ハ本

氣昔然麒麟抄ニ尾浪のふの人多由傳々也春日井

相河村の村民傳云相河乃里道風の生一地名也

○天正十八年刑 大神君卒兵入御武列豊後郡守

城 俗よんてと
冥糸のあへと

江戸の城父安年中上松右京亮憲忠の長臣太田

持資入道灌後等神一云云のころをよ右佐の佐京

政辰城より京政北条氏に属して相列山田原より

り其子川村を於石備をして江戸の城をせしめ

京政甥を山丹波等及び真田隆海等兩人志は

神君の趣一急攻く移せ多きなり慶長十年

新に石城を築き殿閣を修めり也其まのころは

世の洪基ありしなり

○石田の事記し時少西御守と関ヶ原の戦後林を搦

捕く八幡山の沙降等も勅と山登賞として其令十牧

りしれりともやしも経難むまゝ其城をせしめし

法師は捕くらししし海を渡りしを契利刺當の邪

宗より御守は底つくりと為し一は之一旦武官ありし

ゆと記ししなり

石田治部右衛門守道黨少西御守の邪蕨の徒ありし

とも云はし下のゆと記しし名教の輩人云下の悪賊なり

○慶長九年二月 台徳大相國友海道越後路奥

列路等命令して各一里ごころを堀りし先樹と

植せり同年五月下旬よりく成終り今も河同

年八月江戸増上寺源誓國師より賜京師清淨華
院惠照國師の例をうけ

同年十九年右坂の役後て元和元年八月申終りて
味方の獲し城首一万五千二千餘と云、伊東右馬亮
永田宗茂のこし河原せりとも云

○ 後花園院より神皇南方より沙降座のゆき

二月記ありえり、康正二年十月間鴻穴を崩し十月
九日御監中村淳正右衛門守人吉所より唯年長祿
元年十二月二日、依主と殺して、神皇より同い

二年八月神皇沙降路のゆき、又より世説せまれ
書あり將軍家諸及を續右守記と云せり、時世記と云ふや

○ 或人曰當時草彥孤身ありて劔と握鎗と揮武勇

を働しとよと武人者といふ武人者一世を為し
ふれり其及び強豪ありて人は皆がまを己を立て人に

か、家人の功名も自のおこるごとく人皆みごとく及人の
子と云ふ、孤獨の働こくまり世はよりのし、小身あり

侍、彼家と云し、國を持たす人といふ、人は自ら
を出して人を殺し、切立まるといふ、只隨從の

人といふ、を兵と云はり、城を攻又人をいふ、は、下
西階ありと云ふ、名は、多し、家は、多し、自ら、身と、海

小曾大曾見たり、は、何れ、を、盡子の、教と、云、理、奪、は、は、
事あり

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, possibly related to a collection or inventory. The script is dense and difficult to decipher without a key or context. The text is arranged in several lines, with some lines starting with a small circle or dot. The overall appearance is that of an old, handwritten record.

